

しかし、この点に關してはやはり以上で十分かもしれませんので、最初に話題になっていた、祈りの二つの根本的な動きに戻ることにしましょう。

罪責の認識と悔悛

神の聖性の前においては自分自身が無価値であることを人間が覺るとき、最初の根本的動きが成立してきます。自分が利己的で、義しくなく、汚れていて、邪惡であることが見えてきます。自分の不正を実感し、査定します。すなわち、今日の、昨日の、かつての或る日のいくつかの行動を、それだけでなく更に、自分がいま現に嵌まり込んでいる状態全体を、生来の、さらには後天的に育まれてきた自分の現存在を、そして、啓示が理解している意味での、そしてこの自分の中でその本質を展開してもいる姿での「罪」を実感し、査定します。罪とは、生ける神に抗って歩むことであるだけではないことを、つまり、単に不道德なことであるのみでなく、聖でないということを意味していることを、その人は認識します。その人はそのことを見、その通りであると同感もします。そして、「なぜなら、わたしの罪責はわたしには分かりすぎるくらいよく分かっていますから、そしてわたしの罪は常にわたしの前にあるのですから。わたしが罪を犯したのは、ひとえにあなたに抗ってのみしたことでした、あなたが嘉されないことをわたしはしたのです。」「これをわたしは賛美の気持ちを含めて公言しますが、それは」あなたが発せられた言葉が正しさを保ちつづけるためです……」（詩五〇「五一」・五一六）と言っている詩篇第五〇番と同じ

ように、自分自身には抗って、神の言われたことが正しいと認めるのです。

この認識を自分から遠ざけておくやり方には様々な種類があります。最も荒っぽいやり方は、その本人自身が自分の罪責は見たくないと思っている故に、自分自身の罪責が自分の眼に全く入って来ないというものです。この場合その人自身は自分が清らかであると感じています。自分はいつものちゃんとしていたし、悪いことは何もしたことがないと強調します。そして、自称ちゃんとしているということの背後にどれ程の思い上がりか、一見非の打ちどころのなさそうな生活態度の背後にどれ程の善くないことが隠れているか、全く気付いていません。ここで必要なものは真実への意志であり、勇氣です。神は、わたしたちは罪人であると啓示されました。そして、この啓示を真面目に受け止めないことは不信仰なのです。「わたしたちには罪はないと言うとき、わたしたちは自らを欺いているのであり、わたしたちの中に真実はありません」とヨハネは彼独特の迫力で言っています（一ヨハ一・八）。この啓示はわたしたちを神の前に据えます。この啓示は直接的な自己感情の一見清らかで実直と見えることの中に隠された欺瞞を暴いています。そして、この一切の上に立つことのできる立場と、真実を見ることのできる両眼とを信仰者に与えてもいます。このことは、罪人であるということが自虐や不自然さにつながる筈ということを意味するものではありません。実際そういうことになってしまいうことも稀ではないのですが、自虐や不自然さということも、それはそれで真実ではありません。そのみか、自己満足の悪質なタイプということになりましょう。その上、それらのものは、邪悪な結果を引き寄せることにもなります。というのは、このように罪惡感に取り憑かれてしまうということは、相も変わらず——取

り憑かれていますその当の本人においてであるか、あるいは後のいずれかの世代においてであるかは別にして——後になって何らかの形で蜂起へと反転するのが常であるからです。罪についてのキリスト教的教えはむしろ、ひとつの新しい立場を創り出すものであり、善くあるということがより清らかな仕方で実現するための闘いをそこから開始していく勇氣を与えているものです。ですから、罪の認識は元気を失わせる筈のものでも、破壊をもたらすべきものもなく、刷新への力強い意志を生み出す筈のものなのです。

罪の認識を回避するもう一つのやり方は、人間は自分が善くないことをしたということを見てはいる——それも、鋭く見ているし、熱いくらい実感している、けれども、この事実を担い抜くことができないということにあります。その人の誇りが自分が罪人であると認めようとしません。ただし、事実そのものを変えることはできませんので、「わたしは神の前には属さない」と言って去っていくのです。ここでは、必要なものは謙遜です。自分が罪人であることを認識するだけではなく、罪人であることを受け入れることもしなければなりません。それも、自己主張は抵抗しているのに、無理やりそうするのでなく、真摯に、そして心構えをも伴ってそうするのです。ただしその際も、その人が自らの尊厳を貶め、自分自身に対して猛り狂うといった形をとるべきではなく、品位ある仕方、しかも責任意識にもとづいて、そうすべきです。人間は自分が罪人であるという事実の中に自らを引き据え、しかも羞恥にも耐え抜かねばなりません。そうすることの中から刷新は生まれていくのです。

回避する第三のパターンは勇気がないというものです。自分が過ちを犯してばかりいて、骨の髄まで邪悪さが染み込んでいるのを見ると、そして全てが滅茶苦茶になっていて、全く出口がないと実感するとき、人間は諦めてしまう危険に陥ります——その人に強い意志がなく、生まれつき一貫性を欠いているような性格の人の場合には、特にそうなる危険があります。ここでは、頑張り抜くということ自体が一番難しいことなのかもしれません。なぜなら、悟性はあらゆる決意に抗って「そうは言っても、やはりあなたはやり抜くことはしないのだから。やはり又、同じことをしてしまうのだから。」と答えているのですから。

信徒は「一切の希望に逆らって希望しつつ」信頼していなければならないという文章は、当てはまるところがもしどこかにあるとするなら、まさにここにこそ当てはまります。なぜなら、信徒が関わりを持っている神は、「死者を生けるものとし、存在していないものを存在しているかのように呼ばれる方」(ロマ四・一七)でありますから。あのような瞬間においては、人は議論や検討に身を任すことをしてはなりません。自分の上方にあるとともに、自分の中にもある無条件なるものに上訴し、「わたしは頑張り抜きたいと思えますし、頑張り抜きます。なぜなら、神がそう望んでおられますし、あの方は全能なのですから」と言いつつ、いかなる異議をも^{しりぞ}けねばなりません。

人間が自分は正しくないことを承認します。自らの罪を認め、自分自身に抗って神が正しいと

認めます——けれども、これだけでは、人間は聖なる神のもとを離れて行かねばならなくなるだけであり、その結果、一切が失われることになります。ところが、あの方の中にはひとつの秘密があります。この秘密は、それが在るということについての或る微かな勘のようなものは自然的な宗教経験にも既にあるのですが、親密な仕方においては、啓示がわたしたちに保証してくれたものです。すなわち、神は善きことの原作者、かつ正しきことの保全者であるのみでなく、新たな開始のための究めがたき権能でもあるという秘密です。神は、一切の理解を超えたことをも成しうる方です。すなわち、一見究極的なもの、完結した行ない、型押しが済んでいる存在を新たな始まりに向けて改めて取り上げることがおできになる方です。いま引用したばかりのパウロの言葉はこの秘密を指し示しています。ご自身においては完全なる聖性、一切の邪惡に対しては妥協なきⅡ全能の敵意である神は、赦すつもりでおられますし、赦すことがおできにもなりません。ところで、本当の赦し、すなわち、わたしたちが求め探しているものであるとともに、わたしたちにとって唯一つ助けともなるあの赦しは、ひとつの大きな秘密です。その赦しは、起こったことを神が見なかったことにし、過ちを犯した人に再び好意の眼を向ける決意を神がなさるということを意味するのみではありません。これだけではあまりに僅かすぎます。とにかく端的に少なすぎます。そのようなことであるだけではなく、神の赦しは創造的であり、罪責ある者となつてしまった人を、もはやそのような人でなくするものなのです。神はその人をご自身の聖性の中へと取り込まれ、その人にご自身の聖性を分け与えられ、努力と闘いの新たな始まりの中へとその人を据えられるのです。(原注1)

自分の罪を認識した人間は、悔悛して赦しを願うとき、そうしているなかで、この秘密に向けて自己を転回させているのです。

欲求と分有

以上が神の聖性を前にして成立してくる祈りの二つの動きの第一のものです。もうひとつの動きは、神に対するありとあらゆる矛盾を内に孕んでいるにも拘らず、神なしにはいられないという意識をもって開始してきます。第一の動きは、ペトロがゲネザレト湖畔でキリストの神秘的権能のシャワーを実感した際に、「主よ、わたしから離れてください、わたしは罪深い人間ですから」(ルカ五・八) という言葉であの方に申し述べたことと同じことを表現するものです。もう一つの動きは、カファルナウムにおける聖体の約束の際の同じペトロと共に「主よ、〔あなたのもとへ行かないとするなら〕わたしたちは誰のところへ行ったらよいのでしょうか？ 永遠の生命の言葉をあなたはすべてお持ちです。そして、わたしたちは信仰へと到達して、あなたこそ神の聖なる方であることを認識したのです」(ヨハ六・六八―六九)との言葉を発するものです。罪の経験が反抗や勇気喪失となるとき、この経験は繋がりを引き裂くものとなり、人間は神のもとを去って行くことになります。けれども、罪の経験が謙遜と真実の中に留まるとき、自分は聖なる神に属しているものではないとの判断に対しても、この経験は、「それは真実です。けれども、あの方のもとへ行かないとするなら、誰のところへわたしは行ったらよいのでしょうか？」

と答えることになります。人間を撥ねつけているその同じ聖性が、人間を呼んでもいるのです。それは、この聖性が愛であるからです。この聖性は、人間が謙遜と回心の深みを求め探すようにと、人間を撥ね退けます。しかも、いかなる仕方、いかなる程度においてであるにしろ、人間がこの深みに到達したときには、自分のほうへと抱き寄せるのです。

人間は神があのかの総括であることを、すなわち、意味、救い、生命、故郷、一切であることを知っています。ですからこそ、人間は神を欲求するのです。ところで、人間が鈍感になり、意気消沈していて、それ故、直接的な感情に発して神を欲求することができなくなっている時には、人間は、自分はこの欲求を持っているべきなのであり、この欲求を持てるようになるように信仰にもとづいて努力する筈なのだと、自分に言い聞かせねばなりません。「自分が実感していないことは欲しいとも思わない」と言ってしまうといった、高慢であると同時に極めて惨めなものでもある態度に陥ってはなりません。むしろ、自分の感じ方が間違っていることを、そしてそれを正すよう努力することを学ぶ姿勢を持っていなければなりません。飢え渇くように神を求めるということは人間には本質的なことです。この飢えと渇きが欠落しているということは、人間が神を必要としないことを意味するものではなく、人間が病いに罹っていて、癒しを必要としていることを意味しているのです。人間の最も深い本質に属しているものが自分にはない、と自分に向かって言わねばならないということは、誇りを傷つけることです。「それくらいなら止めておこう!」という気持ちになりそうになるかもしれない。この気持ちは真正のものでもあり立派でもあるように見えてはいますが、本当は極めて惨めなものです。かりに神の現実を実感してはい

なくても、わたしたちは信仰にもとづいて自分たちを神の現実に関連付け、神の現実を基準にしていなければならないと同じように、かりに神の価値を知覚することはしていないとしても、わたしたちは信仰にもとづいてあの方のほうへと引き寄せられていかねばならないのです。

この動きも祈りを意味しています。ここでの祈りとは神のほうへと憧れること、あの方の中に入れていただくことと憧れ求めていくことにあります。この祈りは、神のもとにいようとすると、神との間に共通のものを持とうとする、神の生命を分けていただくこととする動きです。トマス・アクィナスについての話があります。神の真実についてのあの大作の中の重要な段落を書き終えた時に、キリストが彼に現れて、「トマスよ、あなたはわたしについて上手に書いてくれました。あなたに何か上げるとしたら、何がいいですか？」と言われたそうです。そのときトマスは、「あなたご自身を、主よ」と答えたそうです。^(訳注11)ところで、聖テレジアは、「神のみで十分です」と記すことで、この事をもっと断固とした仕方で表現しました。^(訳注12)人間の欲求の最深の根底、極限の頂点、全総括は、人間の欲求は神を欲している、という僅かな言葉で言い表すことのできるものなのです。

これらの文章はたとえば敬虔であるというだけではなく、正確であるとともに真理でもあります。価値があるとともに現実でもあるものを占有したいとわたしたちは思っています。けれども、わたしたちは何を占有することができるのでしょうか？ 或る物が気に入っているとします。わたしたちはその物を購入し、抱えあげ、家に持ち帰ります。このことをもって、わたしたちはそ

の物を占有していることになるのでしょうか？ わたしたちはその物を使用することができます。他の誰かがその物を取っていくことを妨げることができます。けれども、わたしたちはその物自体を本当にわたしたちのものにしているのでしょうか？ その物を失うことができるのか、その物自体が駄目になってしまうこともありうるのか、いずれはわたしたちもその物を残していかなばならないとかいったことではなく、本当の意味では、わたしたちはその物を持っているです。単に外的に保管しているだけでしかないのです。わたしたちの占有力と事物のあいだでは、「所有している」という語が本来意味しているあの最高に内的な一体性が成立することは決してないのです。常にそこには深い裂け目が残ります。人間との場合でも状況は変わりません。わたしたちは——自由で人格的な存在者に対して可能であるかぎりの仕方で——その人と結ばれていたいと思い、結ばれていると確信していたいと思っています。けれども、そのようなことができるのでしょうか？ わたしたちはその人の信頼を獲得することができるかもしれません。その人の愛を貰うことができるかもしれません。忠実、権利、献身など、ありとあらゆる絆でその人と結びついていることもできるかもしれません——それでもなお、最終的には隔たりというものが残ります。神のみが、一切の真実であり、一切の存在である方、聖なる方にして、隔絶された方であるあの方だけが、本当に人間にご自身を与えることをなしうる唯一の方なのです。あの方のみがわたしたちのものとなることがおできになるのです。それは事物にはできないことです。人間たちにもできません。わたしたち自身にすらもできないことです。あの欲求を満たしてくれる近さは、神のほうからわたしたちへという方向でしか可能ではないのです。聖

書では絶えず「わたしの神」という言葉が回帰してきます。「わたしは主に向かって言葉を発します、『わたしの神でいてくださるのは、あなたです』」(詩二三九「二四〇」・七)。この言葉は心の、心臓の原鼓動音であります。そして、ここ、啓示の領域において、改めて精氣を与えられ確認されているのです。そう、そもそもこの原鼓動音は、「わたしはあなたがたの神となりた」との言葉を神自身が発せられる(レビ二六・一二)なかで、初めて可能となるものでしかないのです。アウグスティヌスは「神を掴む能力がある」という言い方を用いて人間の魂の本质を表現しています。^(原注13) 神を掴むことができるもの。ただし、この言葉が言っていることはそれ以上、人が掴むことができるのは、基本的には神のみでしかないということ——そして、更にその先をわたしたちが続けるなら、事物や人間たちを掴むことができるのも神においてではない、ということなのです。^(原注12)

このことが表現されているのが、憧れ求める祈り、欲求する祈り、分け持ちたいとの祈り、一つになりたいとの祈りにおいてです。

この事実をもって、この祈りは理屈抜きで愛となります。というのは、愛とは生きている人格的存在者を自分のものとして所有するということであるからです。宝石、花、あるいは芸術作品などはわたしは貰ったり購入したりすることができます。これらのものに触れて実感することがわたしにはできません。このようにしているとき、これらのものはわたしに属しています。けれども、或る人間が本当にわたしのものとなるためには、わたしに属しているということが、自由と内奥とに発して起こらなければならないのですが、それは、その人自身が自分をわたしに与え

るのでなければ、起こりようのないことです。人間どうしにあってすらそうであるとするなら、神との間ではどういふことになる筈なのでしょう。あの方が、自分ご自身と一切の事物との主であるあの方がわたしたちのものとなるうとしておられるということは、そののみか、そもそも、わたしたちのものとなることがあの方の神的本質に適っているということ自体も、あの方ご自身がわたしたちに啓示してくださるねばならないことです——そして、このことをわたしたちが信じ、実行することができるといふことも、あの方がわたしたちにプレゼントしてくださるねばならないことなのです。これが、神のみが、ただおひとり最深の愛を満たすことのできる方、否、そののみか、ただおひとり最深の愛をそもそま呼び起こすことのおできになる方であるといふ、神的愛のあの秘密を形成してもいるのです。そこから、わたしたちは、あの方がご自分の愛に対する欲求をわたしたちにくださるうに、そして、この愛を完結することをも教えてくださるうにと、願わねばならないのです。

罪責意識の中で神から遠ざかろうと後ずさること、神との分かち合いに対する欲求の中で神を憧れ求めること、この二つの要素は、祈りの名に値するどの祈りにも、程度の差はあっても含まれています。まだ極めて微かなもの、様々な考えによって辛うじて維持されているにすぎないものでしかないにしても、何らかの意味において、神の聖性は、どのような祈りにおいても既にその真価を発揮しているのです。そして、この力が発揮され始めるや否や、人間は直ちに、自分が聖ではなく、神に属してもいないことを実感することになります。けれども同時に、神こそが自分の救いであること、そして自分が神を憧れ求めていかねばならないことを実感しめるのです。